

参詣発達の一前提：社会の援助

新城，常三

<https://doi.org/10.15017/2331272>

出版情報：史淵. 82, pp.1-21, 1960-08-15. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

参詣発達の二前提

— 社会の援助 —

新城常三

一

古代以来中世を通じ、僧侶が、参詣者群の中に占むる比重はかなり高い。平安時代に於ける山伏、持経者、聖、修行僧等の斗藪、巡歴の盛行は、今昔物語集、一書からだけでも、容易に証明される。⁽¹⁾各社寺参詣、西国巡礼、四国遍路寺の開創者の多くは僧侶であり、しかも、僧侶は一般に中世初期迄は、俗家を超えて参詣の主体的勢力を占めていた。彼等は、略次の食、住を如何にして解決したか。彼等は求道者として凡ゆる困苦欠乏に耐え得たであろうが、飢は凌がねばならない。彼等は道中食を購う為の多額の貨幣を所持したとは考えられず、日本靈異記⁽²⁾が随所に描く如く、僧侶の宗教的務めでもある頭陀、乞食等により、社会よりそれを獲たものであろう。僧侶に対するかかる社会の同情、協力が、無銭の僧侶をして、その行旅を可能ならしめた有力な支えの一つであつたのである。

古代以来の寺院、僧侶の社会的事業は、多面に亘るが、交通上に於ても貢献した処少くない。寺院が旅宿として貴重な存在であつた外、僧侶、俗家の建立にかかる幾種かの慈悲的な宿泊所乃至休息所がある。中世の且過堂及び接待所等もその一つである。これは、共に印度、中国に原型が求められ、円仁の「入唐求法巡礼行記」に依れば、中国で当時順礼や求

道者の為に、普通院と呼ばれる無料宿泊所があつたといふ。⁽³⁾

先ず且過堂、且過寮は、元來禪院の一室を指し、当該禪院に、道を求むる修行僧の一泊する所、即ち且を過す室を指したが、いつしか本堂と独立して旅人の旅宿に開放されるに至つた。かかる社会的施設としての且過堂は、偶目する処、次の如きものがある。

一、撰津有馬温泉に、夢窓疏石の創設した且過堂無垢庵あり、室町中期迄明らかに存続している。⁽⁴⁾

二、応永一一年、薩摩鳥津元久、同々豊は、十父氏、若菜清善の為、田地を寄進して、且過同集庵を建立した。⁽⁵⁾薩摩旧記所集二十三、福晶寺

三、文明の頃、伊勢二見西村に且過屋あり。⁽⁶⁾賜蘆文庫文書十四

四、文龜の頃、豊前に且過寮あり。⁽⁷⁾永弘文書ヲ、八三断簡文書

五、永正の頃、近江永源寺に且過寮あり。⁽⁸⁾永源寺文書三

六、天文以降、駿河府中修福寺にあり、今川、武田、徳川氏等歴代の保護を受けた。⁽⁹⁾修福寺文書

七、紀伊高野山鐘樓前にあり、二重造りにして、上階に准胝観音像を安置し、下階は四壁なく、諸国より参籠して宿坊なき輩、この堂に投宿したが、寛永七年焼失以来再建されなかつた。⁽¹⁰⁾紀伊統風土記、高野山

八、近江石山寺門前に且過堂があつたが、同じく近世に入り廃絶し、地名を残すのみとなつた。⁽¹¹⁾石山要記一—三

九、某 所（草山集）

管見の及ぶ処、かかる意味での且過堂の発生は比較的遅く、一の南北朝を、明証としては二の応永を初見とし、総数も亦限られている。一、五、六の如く禅院関係の外、石山寺、高野山等の他派寺院や、俗家の建立にかかるものもある。何れも後世の記述乍ら、七の高野山では、宿坊なき輩が投宿し、二は九州僧録所薩摩福昌寺の年忌法事に集まる緇徒数百人の為に設けられた。⁽¹²⁾更に九の草山集にも、旅人の飢えを助く為とあるように、且過堂は僧の外、俗家にも宿泊所として開放されたようである。

次に巨過堂と類似の施設に接待所がある。巨過堂の宿泊施設に対し、接待所は、主に旅人に湯茶を施す休息所を指すよう
 うで、節用集が、接待に煎茶施人と注したのも参照すべきである。我国接待所ないし接待庵の源流は、中国に求められ
 る。中国の接待所の起源は、比較的古いが、南宋以後俄に発達したという。⁷⁾ 我国接待所も、南宋時代の彼我禅僧の往来等
 によつて発達したであろう事は、その初見が南宋滅後十八年の、永仁四年の東海道菊河宿であるのや、その設立の大半
 が、次の如く、禅院、禅僧の手に俟つことからも窺われる。

中世の接待所は、相田二郎氏が既に六ヶ所を紹介されたが、管見分を加えれば、現在の処次の十七ヶ所が列挙される。

- 一、遠江菊河宿 永仁四年
- 二、紀伊和佐庄歆喜寺
- 三、尾張妙興寺
- 四、近江、尾張、駿河
- 五、駿 河
- 六、越後糴脱庄
- 七、安芸梨子羽郷
- 八、伊豆熱海広済接待庵
- 九、土佐五台山
- 一〇、相 模
- 一一、紀伊隅田宮
- 一二、紀伊百済寺
- 一三、近江福磨寺
- 一四、陸 奥

参詣発達の一前提(新城)

- 平 田 寺 文 書
- 歆 喜 寺 文 書
- 妙 興 寺 文 書
- 起 山 和 尚 語 録 所 収
- 妙 興 開 山 円 光
- 大 照 禅 師 行 状
- 同 上 書
- 上 杉 文 書 一ノ一〇三 号
- 小 早 川 文 書 一
- 空 華 日 用 工 夫 略 集
- 同 上 書
- 義 堂 和 尚 語 録 三
- 隅 田 文 書 所 収
- 隅 田 八 幡 由 来 略 記
- 百 済 寺 文 書
- 蒲 生 郡 志 七ノ七九七頁
- 謡 曲 “接 待”

一五、武蔵、下総

太平記廿 結城入道墮地獄事

一六、常陸白庭（嘉元三）

夢窓国師年譜

一七、下総岩崎接待積善庵 貞治三

香取文書纂二

以上の如く接待所は、且過堂に比し數に於て優り、分布範圍も亦より広汎で、その普及度の高さが推察される。しかも接待所の機能が、節用集の如く、必ずしも単に茶の接待に止らぬ事は、前表十五の太平記に、

：其比所縁ナリケル山伏、武蔵國ヨリ下ル事アリ、日暮野遠シテ、宿トルヘキ宿ヲ尋ル所ニ、律僧一人出来テ、イササセ給ヘ、此辺ニ接待所ノイヘハ、ツレ進セント申ケル間、此山伏喜テ、律僧之引導ニ従フ：

とあり、夢窓国師又常陸白庭の接待所に宿泊した如く、休息所の外、宿泊所も兼ね、且過堂との本質的差異が明瞭でなく、單なる名称の相違に過ぎぬ様にも思われる。しかし注意されるのは接待所が且過堂に比し、更に閉鎖的で、單に僧侶の爲の存在で、一般旅人にはその門は鎖ざされていた様である。熊野路に當る前表二、紀伊歎喜寺接待所は、同寺長老賢心が、住反禅律僧尼の爲に設置し、同じく三の尾張妙興寺開山滅宗宗興は、近江、尾張、駿河三国の接待所で、雲水の便宜を計り、更に四、起山和尚の近江接待庵設立の趣旨に、納子之江西湖南往来者以為憂に由るものであり、更に一〇、比丘中明の相模雲集接待庵は、往来雲水との結縁の爲であつた。以上の外、謡曲「接待」の佐藤嗣信母の設立せる接待所は、専ら山伏を対象とするものの如く、何れにせよ、接待所は明文に基づく限り、何れも禅僧等、僧侶山伏等の利用に止り、一般民衆には無縁の存在であつた。接待所の閉鎖性は、恐らく中国に淵源するのであろう。かくの如く且過堂とくに接待所と一般旅人との關係は稀薄であるが、これに反し旅僧の利益は少くないであらう。しかし、且過堂、接待所に止らず、旅僧が一般社会より享くる便宜と恩恵とは、一般に大なるものがあつたのである。

僧侶は古来宗教家としてのみならず、知識技術を持つ文化担当者として、一般社会から高い尊敬を払われていたが、宗教的雰囲気濃厚な中世に於ては、特に著しかった。「北条重時家訓」の

…沙門にゆきあひ申候はん時は、馬よりおり給ふべし…

とあり、「今川了俊制詞」にも、

…出家沙門尤も尊崇を致し、礼を正しくすべきこと、

と記され、降つて武田信玄また、

…仏体をまなぶ出家を、楚忽に礼明いたす事、何と無智の僧にても、下々にてならざる様に常々仕置…

と述べている如く、中世を通じて明瞭な、武士の僧侶に対する尊崇的態度は、亦一般社会のそれを反映したものに外ならない。これは僧侶の行旅、参詣等に際し、当然具体的な援助となつて表現されざるを得ない。しかし旅僧に払われた援助や便宜は、僧侶に対する人々の単純な好意や尊敬の発露に止らず、かかる行為が、人々自身の宗教的願望の達成に役立つとの信仰にも由るのである。僧侶への善行は、仏教の福田思想が奨める処であるが、人々の旅僧寺への奉加、宿泊その外の支援が、寺院への寄進同様、やがて仏の慈悲に浴し、自身の信仰的要求を充すべき因縁になるものであると信じられたからである。

承安四年、吉田経房の熊野詣の際、「進発以後、所々の上人に奉加、或は食を山伏に与うることを、記し尽すにいとまあらず」であり、又「下向の山伏多く食尽きし由を称えば、毎度每人之を施す」であつたが、かかる度々の布施も要するに「けだし後世の資糧に非ざらんや」の信仰的意図に発するものであつた。¹⁰⁾

更に降つて、中世人のかかる意図は、謡曲等が好んで採り上ぐる処であつた。謡曲「鶺鴒」では、

「一僧一宿の功力にひかれ…」

とあり、同じく「梅枝」では、身延山の僧侶が、路次の庵に一宿を乞うた処、庵主は

…実に出家の御事、一宿は利益なるべけども…

と言いつつも、

……さながら傾く軒の草、埴生の小家のいぶせて、何と御身をおかるべき……

を理由として、一応拒絶している。更に「鉢木」でも、一旦、時頼の宿泊を断つた佐野常世に対し、その妻が、

……あさましや我等かやうに衰ふるも、前世の戒行つたなき故なり、せめてはかやうの人に値遇申してこそ、後の世の便ともなるべけれ、然るべくは御宿を参らせ給へ……

と、夫の翻意を促し、常世又

……さやうに思しめさば、何とて以前には承り候はぬぞ、いや此大雪に遠くは御出で候まし……

と早速時頼を追いかけている。

かくの如く、僧侶への善行により、仏の慈悲に預り得ると確信され、僧侶の多くは世人よりの宿、食の供与に依り、各地を遍歴し得たのである。

僧侶の内、斗藪の積み重ねを誇る山伏、旅を栖かとする遊行僧、行商人たる高野聖、道者の案内人先達のように、一定の通路を、幾度も往還する者が少くない。そこには、自然沿道民家との間に定宿の關係が結ばれ易い。能登石動山先達が、近江滋賀郡比良に来て、

いつも我らが泊り候、莊司と申す者の処に泊り候べし。

と述べており、謡曲「道成寺」の熊野先達は、ある莊司宅を常宿として年々宿泊し、莊司の女に想わるる身となつた。

更に宿泊より軽い恩恵に与る事は一層容易であつた。従つて「太平記」の

熊野參詣之山伏共、道ニ迷ヒテ来レル由ヲ云ケレハ、在家之者共哀ヲ垂テ、粟ノ飯、椽ノ粥ナト取出シテ、其飢ヲ相助ク

等は、恐らく日常茶飯事のことであろう。その外、世人は中世交通の瘤、関税及び舟賃等を減免して、僧侶に報いてい

る。⁽¹³⁾

以上の如く、僧侶、山伏等に対する施行が、尊敬又は福田思想等に発すると共に、より実質的な利害關係に由ることも亦無視されない。則ち、僧侶、山伏は文化担当者、加持祈禱師等の性格より、治病その他、民衆の現実的悩みの救済に役立つからである。「太平記」によれば、西国巡礼の山伏に扮した大塔宮が、民家に一夜の宿を求めた処、下女が現れ、

是コソ然ヘキ仏神ノ御計ヒト覚テ候ヘ

と、引き入れたが、それは

是ノ主ノ女房、物ノ怪ヲ病セ給ヒ候、祈テタハモセ給ハラシヤト……

の爲であつたが、かかる例は当時非常に多いであろう。⁽¹⁴⁾

以上の如き、寺院、僧侶並に一般社会が、旅僧に示した好意、同情が、身に寸銭も帯びない、多数僧侶の行旅を可能ならしめた有力な一因であろう。それならば社会は一般行人に対しても亦、僧侶同様の支援を惜しまなかつたであらうか。

(一) 同書、十一、十二、十三卷の殆ど全卷に亘りかかる例が見られる。

(二) 日本靈異記の諸所に、沙弥、優婆塞、持経者の乞食する例が挙げられてある。

(三) 別稿旅宿の發達。

(四) 堀一郎氏「我が国民間信仰史の研究」二卷十編一章。

(五) 臥雲日件録、宝徳四年四月十八日。藤涼軒日録、文正元年二月二十八日、壬三月三日、十五日、二十日。

(六) 島津国史八、惣翁公、久哲公下

(七) 玉村竹二氏教示。

(八) 中世の接待所(中世の関所)所収。

尚同氏の紹介済みのものは一、二、三、六、七、九である。

(九) 以上家永三郎氏、岩波全書「日本道徳思想史」一二八頁。

參詣發達の一前提(新城)

參詣發達の前提（新城）

(一〇) 吉記 承安四年九月二十九日。

(一一) 謡曲『比良』

(一二) 參考太平記五、大塔宮熊野落。

(一三) 熊野先達に対する關稅免除もその一つである。国史学六〇所収拙稿熊野先達參照。

(一四) 一二に同じ。

(一五) 旅僧に親切にした為、泉が湧いたとか、反対に不親切な為、井戸を封じられたという伝承が全国的に多いのは、旅僧に対して、如何なる態度を採るべきかを教えたものである。或は四国に弘法大師の布施を断つた為、子供が相尋いで死んだという右衛門三郎伝説（景浦勉氏、四国遍路の田緒と右衛門三郎の伝説、伊予史談一二四）があるのも同様に解されよう。後世の専ら、醍醐寺派修驗日向泉光院野田成亮が、文化文政年間、全国を廻遊し、至る所で歓待を受けた。その理由は、行者に対する尊敬の外に、他の実質的な期待が籠められていた。その折の紀行記『日本九峯修業日記』より、これを拾えば、凡そ次の如きものがある。

一、病氣の加持祈禱の依頼

日向高松（文化九年九月十五日条） 外四例

二、珍しい話題を求めて

薩摩水前寺（文化九年十一月四日） 外三例

三、占い又は易の依頼

但馬丹後村（文化十一年六月五日） 外一例

四、語り物の依頼

丹後河北村で……信州善光寺如来縁起読みきかせよ……

（文化十二年二月十六日）

以上は、近世一修験の廻國途上の体験であるが、中世に於ては、医術の未発達により、僧侶、修験の加持祈禱、施療に対する期待はより切実であり、又閉鎖性のより濃厚な中世社会に於て、彼等に物珍しい話題の提供を求むる希望はより強かつたであろう。

古代国家が衰頽し、それに代る封建制度の、一般に未成熟な段階期の中世初、中期に於ては、政治権力の成長が低く、民衆生活に対する政治権力の庇護は稀薄である。従つて、かつて国家の経営にかかる民衆の爲の、公共施設、厚生施設等も多く放置され、それらの経営、維持は、民衆自身の負担に転嫁されるようになった。かつて、律令国家の責任で行われた道路、橋梁、海難施設等の築造、改修が、中世に入り政治権力より見放されて、民衆の手に委ねられ、その結果、その規模、技術が後退した事は、かつて詳述した処である。⁽¹⁾ かかる政治権力の怠慢に対して、立上つたのが僧侶であるが、彼等が道路、橋梁の建設、築港、防波堤の建造、又は旅宿の提供等、民衆行旅の爲に尽した功績には、特筆すべきものがある。⁽²⁾ かかる例の大半は旧仏教僧侶であるが、中世の新仏教僧侶も、或は宗教家の立場より、或は教線拡大の手段として、かかる企てを積極的に押し進めるものもあつた。なかでも曹洞宗僧が著しく、例えば、越前龍沢寺梅山開本は、美濃の駅路にあつて、先師順寂の爲に、往来の人馬を労ること約十万に及んでおり、相模最乗寺了菴慧明の妹、慧春尼は、庵を山下に占めて、生涯往来人馬の接待に携つた。⁽⁴⁾ 更に文明、永正の頃、駿河大祥寺正順は同国富士郡に永明寺を創めて、旅人の休息所に宛てた。⁽⁵⁾ 以上、僧侶、寺院が、一般旅人の爲に払つた努力には軽視し難いものがあるが、これに対し、一般社会はどうであつたか。

中世社会は一般に政治権力が弱体な上、莊園又は村落単位の濃厚な自給自足経済生活が支記的である。かかる社会では、隣接社会との交渉は、ひとり経済的にのみならず一般に概ね稀薄であるから、従つて、彼等中世人の意識する社会圏は自己の村落、莊園等に限定され、きわめて狭隘にして且閉鎖的であつた。中世末、莊園の崩壊、村落相互の聯合、商業の発達、大名領の成立等、一聯の社会的、経済的進展による、自給自足経済の弛緩、広域経済の発達につれ、人々の社会

圏と視野とは次第に拡大されつつあつたが、一般には、中世人が自己の郷土として意識する地域範圍は狹隘であつた。生活資源の一切は、自己の所屬する共同体によりまかなわれ、外部社会に依存することの少い、かかる閉鎖的な社会人は、外部社会の恩恵を感じず、従つて郷土を超えて、広く一般社会に奉仕しようとする公共精神には、乏しかつたものと解される。江戸時代、文化の頃出雲を通過した一旅僧が、土人の冷淡な態度をなじり、

…雲州一國の者、他國へ出る事、甚禁じてあり、因て旅といふことを知らざる者多き故、人の情も慈悲も、知らざるもの多し⁽⁷⁾

と、外部社会との接触乏しき閉じた社会の住人に、広い隣人愛が薄く、旅人に冷やかなことを指摘している。中世に於て、郷土を超えて、より広域の人々の為の公共施設である、道路、橋梁、海難施設等が一般に未発達なのは、かかる社会が生み出す当然の結果であらう。⁽⁸⁾ 又そこから自然、社会を異にする未知の旅人に対する、人々の一般的態度が凡そ如何なるものが推量されよう。

中世道路と水路との至る所に、関所が濫立され、旅人の全てが仮借なき破滅的な収奪を免れなかつたのにも、又人間の本性と中世法とを完全に裏切つて、漂流者、漂着船の掠奪が、至る所練り扱げられたのにも、⁽⁹⁾ 中世人の旅人||外部社会人への冷酷無漸な態度が、完膚なき迄にえぐり出されている。従つて中世に於て一般旅人を対象とする様な厚生施設の見られぬのもうなすけよう。

孤島、山間僻地等では、往々異人欲待の風 (hospitality) が濃厚で、旅人に対する性的な響応を慣習とする処すら八丈島等には見られる。⁽¹¹⁾ この様な極端な例を別としても、閉ざされた中世の単調な農村の人々が、未知の世界の物珍らしい話題の提供者として、旅人を歓迎する場合も稀ではないであらう。⁽¹²⁾ しかし乍ら、叙上の理由よりして中世旅人が、一般人々から温く迎えられたとは考え難いのである。⁽¹³⁾

しかし人々が敬虔な信仰の持主であれば、彼は僧侶と同様な宗教的立場に立つて、旅人の奉仕に積極的な態度を採り得

るであろう。「地藏菩薩靈驗記」の鎮西赤間関包政の説話は、ややこれに近いものがある⁽¹⁴⁾。

- (一) 抽稿、中世の橋と渡(文化史研究四)
- 寄 船 考 (歴史地理八十四ノ三)。
- (二) 辻善之助氏 新訂日本文化と仏教第九章。
- (三) 日域洞上諸祖伝巻上ノ二〇頁(曹洞宗全書)。
- (四) 重統日域洞上諸祖伝巻二ノ一六頁(同上書)。
- (五) 日本洞上聯燈録七(同上書)。
〔以上鈴木泰山氏、禅宗の地方発展参照〕
- (六) ・(八) 註(一)に同じ。
- (七) 日本九峯修業日記、文化十一年四月二十一日。
- (九) 関所に関しては、相田二郎氏「中世の関所」の諸論稿参照。
- (一〇) 前掲、抽稿寄船考。
- (二) 文献として著名なものには、古事記等を別として、八丈島のかかる風習を語った「北条五代記」五ノ四があるが、その風の尚、江戸末まで見られたことは、流人近藤氏の「八丈実記」巻三に詳しい。大間知篤三氏、八丈島の女性(民俗学研究十五ノ一)。
- (三) 本節前段一、註(一五)に、近世文化の頃一回国僧が、旅先での珍らしい話題を求められて引留められたが、人々のかかる希望には、僧侶ならずとも旅人一般が応じられるものである。更により交通不便な、より封鎖性の強い中世人のかかる希望は、近世人にも増して大なるものがあつたであろう。
- (三) 日本書紀大化二年、大化改新の詔の中でも、人々が旅人に不親切な事を戒めているのは、味うべきである。
- (四) 同 書 二ノ七 治病利益。

三

以上の如く、私は、中世人の一般旅人に対する平均的態度は、同情的よりもむしろ冷淡なものと解するのである。しかし乍ら、その旅人が参詣者、巡礼等である場合は、事情は多少異り、世人の歓待を受けることが少くないのである。それは巡礼が聖なる行為の実践者として、世人より僧侶同様の敬意が払われ、又彼等への奉仕は、僧侶同様、神仏の慈悲、加護となつて、善行者に還るとの観念からである。しかしこれは日本だけでなく、ヨーロッパ巡礼が路次歓待されたのも、これと類似した事情に由るようである。^①

永正以前の一禅僧の語録『鷲林拾葉集』に依れば、西国三十三所順礼の一沙門が、十方且那の助成を乞い、

…雖然一鉢空夏日難堪三衣凍冬夜□恐、故徃四裔之門戶 勸十方之境越處也 依之酬一紙半錢之結縁 期唯一蓮台之託生 依一夜半

日之値遇 成一仏浄土之聖衆

と勸進している。^②文中、一紙半錢之結縁に対する一夜半日の値遇とは、宿泊、饗応等の接待を指すに外ならないが、巡礼に対するそれらの提供こそ、唯一蓮台の託生を期し、一仏浄土の聖衆となる事が出来るというのである。事実、人々のかかる宗教的確信こそ、巡礼その他への接待を広汎な習俗に迄高めた有力な一因であつた。

前掲旦過堂中、高野山や島津氏が俗家参詣者を対象した如く、旦過堂はこの方面にも貢献したであらう。又文明年間、越中豪族土肥将真が立山参詣者の為、登山期の五、六、七の三ヶ月間、山麓に功德湯を沸かして入浴させたのもその一例である。^③

参詣者中、社会の同情の最も敦かつたのは、西国巡礼、四国遍路等の一聯の巡礼であつた。近世初頭『慶長見聞集』等の著者三浦浄心の『順礼物語』によれば、彼の壮年の頃、関東地方の村の寄合には、

…西国巡礼せし者をば、今生後生、諸願成就せし人とて、老若下賤を撰はず、上座につけ…

るのが慣習で、為に村からの巡礼が増したという。郷土の巡礼に対する尊敬が、その日常生活に具体的に反映され、それがやがて郷土農民の巡礼の盛行を促す一因となつたことを物語つてゐる。しかも郷土の巡礼に対する態度は、中世に於てより敦つたものと解され、巡礼は一般に郷土の温い声援に送られて出発したものであろう。更に一方彼等を迎える、社寺及び現地側でも又、一般に同情的である。嘉暦二年、阿闍梨行祐は、西国二十三番札所河内勝尾寺に、廻国巡礼行者の一飯料として、私領田を寄進し、恒久財源に充当した。更に謡曲“粉川寺”に依れば、三番札所粉川寺は、年間三日を除き、常に人を泊めており、文明四年巡礼四、五名が、札所興福寺南円堂の傍ら一言主祠の拜殿西間に宿泊した如く、巡礼は札所の廻廊等を夜のねぐらに利用したのであろう。

更に室町中期の“三十二番職人歌合”の巡礼歌に

同行のめぐる御てらのそのかずに

三十三の茶がはりもがな

と、茶の接待も行われた。事実社寺の休息所は、西国札所以外にも少くなく、本願寺の他屋は宿泊所と休息所とを兼ねたが、備前一宮にして、六部納経所たる吉備津彦神社にも文明前後、二間、三間の瓦葺の廻国旅人休所があつた。

かくの如く、札所及び参詣寺院の外、一般寺院や辻堂等も亦、宿所その他に、巡礼が容易に利用し得たことは疑ない。以上の畿内の外、関東地方では栃木県芳賀郡益子町地藏院本堂の壁板には、天文以降の坂東巡礼が誌し残した数多くの落書がある。当地は坂東札所十九番下野大谷寺より、廿番同西明寺への更に常陸笠間への路次に当り、しかも西明寺に近い点よりして、巡礼のよく利用する処で、この落書は宿泊した巡礼の筆の跡であらう。京都清凉寺藏“融通念仏縁起”にも、巡礼、参詣者が寺の廻廊に臥している。恐らく一般的な姿態を写したものであろう。

この様に寺院は巡礼を敦く迎えたが、更に一般社会の巡礼に与える便宜は、尚これに優るものがあつた。既に永享の頃“竹居清事”は、

茶店の十の内八、九は、これが報酬を求めず、辺土、田舎の疲民、窮戸と呼ぶべき貧民も 己食わずしても 西国巡礼に食を与えるもの多く

と伝え、延徳、明応の頃の“天陰語録”には

開史議リテ之ヲ征セズ、舟師憐シテ之ヲ賃セズ、或ハ食ヲ推シテ之ヲ食ワセ、或ハ衣ヲ推シテ之ヲ衣ス…

と結んでいる等、表現の誇張を考慮しても、西国巡礼に対する社会の深い同情は、推察するに難くない。これらの史料の提供者が、京都禅僧である点、描かれた風景も亦畿内乃至その周辺地域であろう。更に参詣への現地の協力的態度は、四国遍路に於て、最も典型的な例証が見出される。

遍路と接待とは開聯深く、遍路が今日迄盛行を保つた背後には、四国一円に亘る接待の慣行が無視されないであろう。中世に於る遍路史料の絶対的不足は、接待に就ても殆ど窺い得ないが、西国巡礼等より推して、その起源は相当早いものであろう。元龜二年六月、土佐一宮の壁板に残された、金松なる者の落書に⁽¹¹⁾

一、あらあら御はりやなふなふ何共

やどなくて、此宮にとまり申候

と礼所の外、神社も亦遍路の宿所となつている。四国人の好意が明確化するものは、慶長三年、阿波蜂須賀茂政の駅路寺に關する制定である。この年、彼は領内主要道路の大体一定間隔の寺院を撰定して、遍路等の為の宿所に宛てたが、その寺は長善寺、青色寺、梅谷寺、円頓寺、長谷寺、瑞雲寺、福生寺等の七ヶ寺で、その第一条は次の如くである。⁽¹²⁾

一 当寺之義 往還旅人為一宿建物に候条、慈悲為肝要、或辺路之輩、不寄出家、侍、百姓等、

行暮於相望者、可有似合之馳走事

必しも遍路に限定されぬが、遍路の蒙る利益は少くなく、且つ領主のかかる制定には、既にその以前に、類似の慣習が当地方に広汎に存在していたものであろう。

参詣者、巡礼に対する世人の同情は、現地外でも稀でない。大永の頃、連歌師宗長は、駿河で一豪族に、巡礼を優遇し過ぎると忠告した程である。¹⁵又足利鑓阿寺文書には、室町中頃、左記内容の書状がある。法眼定基が、鑓阿寺不動院に宛て、西国巡礼に旅立つた山河兵部の召使人に一宿の恵みを依頼し、更にその追書で、前途上州並に越州へも、鑓阿寺より同様の紹介状を送られ度いと述べている。¹⁶又恐らく天文前後の、宗興より勝尾寺寿慶宛て書状の一節に、¹⁷

此兩人為遍路罷越候 一宿等之儀被仰付候て給候者 可為祝著候

と、同じく遍路に対する宿泊の依頼状があるが、かかる紹介状によつて、巡礼、遍路は前途の援助を確信しつつ行を進めることが出来たであろう。社会一般の好意にも拘らず、未知の社会を遙かに越えて、社寺を目指すのは限りない不安が伴うもので、この不安こそ、長途行旅、参詣を中世の人に躊躇さす有力な内因の一であつた。熊野先達等による案内は、かかる道中不安の解消に効果的であつたが、¹⁸一般には集団参詣その他の方法で、自力解決の道を講ぜねばならなかつた。その最も有効な方法の一つが、彼等が紹介状を携え、更に途中で先々へと新たな紹介状を貰い受けて進む事であり、これに依り人々の好意と接待とを予め確約し得る事は、彼等に多大な安心感を齎したに相違ない。

世人の参詣者、巡礼に対する好意は、必しも宗教的共感に基く自然発生的なものとは限らず、外部からの勧説啓蒙に、依り、絶えず世人の注意が喚起されていたのである。先の「鷲林拾葉集」の一沙門の勧説は、その一例であるが、永正年間の「中山寺縁起」¹⁷に

巡礼に対し、或いは財物、衣類を取をかし、悪言をなし、忿謗せば、現世に悪報を受、未来に無間地獄に入なり……

と巡礼への非道行為が、怖るべき仏罰を以て報われる事を説くと共に、或は

路傍の舍民資飯、宿茶、分に随て、喜捨せよ、現来決して善果を得ん、とあり、或は

巡礼の道筋をおしへ、嶮道を平直して、現に利益を得たるもの多し、みな信受奉仕せよ

と、巡礼への奉仕の功德を力説して、勸奨している。更に中世、近世を通じ、社会の厚遇著しかった巡礼に、六十六部廻国巡礼があるが、室町中頃の日光輪王寺蔵の¹⁸“六十六部縁起”によると、昔、景時房が六部に勸進した為、報いられて大武士梶原景時となつたと誌し、六部に対する一紙半銭の援助を奨めている。

社会の諸々の援助は、参詣、巡礼発展の一の社会的条件として看過されぬが、上述の諸例に徴しても、特に西国巡礼、遍路等の受くる恩恵が最も敦かつた。その理由は明確でないが、巡礼の体験する一社一寺参詣に比すべくもない、高い苦行性と困難性が、特に世人の共感と同情を呼んだ為ではあるまいか。往々他の社寺参詣者が、巡礼姿を偽装するのも、巡礼が、一般参詣者中の特権層であり、従つて、その偽装により、施行、接待又はその他の便宜が得易かつたからに外ならない。

明応七年九月、皇太神宮神主は、御裳濯河大橋再興に関して解文を捧げたが、中で海道の関銭の免税を図ろうと、参詣者が巡礼姿に扮したとあるのは¹⁹、よく巡礼の特権を物語っている。かかる方法による脱税行為は、少くなかつたもの様で、某年昌満なる者の書状に、

順礼躰参詣望存候

とあるのも、同様な目的による²⁰。

かくの如く、多くの参詣の中にあつても、ある種の参詣に限つて接待が敦いのである。その理由は、先に述べた外に、参詣の主体の身分、経済力とも関係あると思われる。則ち社会の援助を必要とするような、比較的貧しい人々の多い参詣

には、接待の慣習が生れ易く、且つ残り易かつたものであろう。⁽²¹⁾

(一) ヨーロッパ巡礼の歓迎された事は、カトリック辞典巡礼、世界史事典聖地巡礼等参照。

ヴァグナーのタンホイザー第一幕第三場で、ローマへの巡礼達を、笛を吹くのを止めて牧童が、お元気で、ローマまでお違者で、このまづしい魂のためにもお祈りを願ひます……と声高く呼びかけた処に、その理由が窺われる。(山岩波文庫高木卓訳)

(二) 統群書類従釈家、

尚現在では、例えば佐賀地方で、お接待して廻路より受けた札が千枚になると、火事の火元にならぬとか、又は四国地方で、この札を田圃につるしておくとお虫害を防ぐ等、農民生活の実利的効果を齎すものという形で残されている。

(宮武省三氏、乞食と廻路、民族と歴史八ノ四)

(三) 芦崎倉一山共有文書、文明十三年十一月十六日土肥将真寄進状。

(四) 勝尾寺文書(刊本)嘉曆二年十一月三日行祐寄進状。

(五) 東院年中行事記、文明四年七月二十一日。

(六) 群書類従十八。

(七) 本福寺旧記。

(八) 備前吉備津彦神社文書、文明三年六月十三日同社置文。

(九)・(一〇) 共に統群書類従文筆所収。

(二) 西森卓氏教示。

(三) 打越寺文書、長善寺文書、多田マチ文書外、慶長三年六月十二日蜂須賀茂政黒印状。

中山太郎氏駅路寺歴史地理五七ノ四参照。

(三) 宗長手記群書類従十一。

(四) 饒阿寺文書十一、五月十七日法限定基書状。

(五) 勝尾寺文書七、二月七日宗興書状。

(六) 国史学六〇所収拙稿熊野先達。

(七) 統群書類従釈家。

(八) 輪王寺当局の好意で一見する事が出来た。(昭和三十三年十一月)

参詣発達の一前提(新城)

(二) 藤波氏秀長官引付、明応七年九月内宮神主解文。

(三) 伊勢古文書集二ノ下、三月一日昌満書状。

(三) 接待施行を必要とする者は、一般に貧しい者であろう。従つて経済的に施行等を必要としない武士等の多い参詣には、接待の慣行は生れず、又永続しないのではあるまいか。例えば、近世に於て、普通伊勢参宮には見られぬ施行が、ひとりお蔭詣でのみ行われる理由の一つにはお蔭詣では、施行を必要とする貧困者、非独立の青少年等が多かつたからであろう。又施行があるから、彼等が群集したのであるが、この場合でも、経済的に余裕あるものは、接待を受けてないのである。（別稿近世の伊勢参宮）従つて、施行者と参詣者の身分、経済力との間には、何らかの相関関係が見受けられるように思われる。この点から、西国巡礼及び遍路に接待の盛んなのは、僧侶の外、比較的貧しい者が多かつた為ではなからうか。

四

参詣者、特に巡礼に対する社会の厚遇は、やがて社会的脱落者をして、巡礼に仮装し、巡礼を生活手段視する者を発生せしむる温床となつた。則ち、乞食等、賤民は、巡礼の仮装に依り社会の同情を受け、容易に物乞いの目的を達成し得るからであつた。

室町中期以前と推定される『三十二番職人歌合』には、西国巡礼と高野聖との二回の歌合が収載されている。本書の登場人物は何れも冒頭の『いやしきもの』で、農民、材木売、箕つくり等の農商工の外、大部が猿ひき、かねたたき等の賤民で、書名の職人とは、単なる手工業者に止らず、より広汎な職業人を意味している。従つて、この巡礼も亦、僧侶、俗家等の単なる一時的姿態たる巡礼ではなくして、巡礼という職業を指し、いわば職業的巡礼と解されねばならない。それは同書に登場するかねたたき、鉢たたき等の如き、托鉢、物もらいにその生活を依存する乞食等の一味に相違なく、その評にも、

…共雖結仏道修行之果、互慕人間榮耀之花

とあり、高野聖と共に、俗臭蔽い難いものがある。

かかる乞食的巡礼の本書への登場は、彼等のある程度普遍的な存在性を意味するものと解されるが、果してこれと相前後して、奈良に多数の乞食的巡礼の往行を確認することが出来る。興福寺では、室町中頃毎年正月二日、乞食の施行を年中行事としているが、『経覚私要抄』長祿四年正月二日条に、

今日乞食三百余人来云云、餅一枚、用途二銭各引之了

とあるのを始め、この後、寛正二年、同六年の同日条にも認められる。ところが、文明三年正月二日条には、

一、乞食往来僧百七十八人之間、餅一、用途一文引之、此外巡礼者至夕多之間、或餅或用途皆以替之云云。

とある。ここで多数の巡礼が、興福寺を訪ね乞食往来僧と同じく、餅、用途等の施与を受けているが、彼等も亦、単なる巡礼ではなくして乞食巡礼であることは、文面よりして疑ない。同寺南円堂が西国九番札所である点を考慮すれば、彼等の大半は西国巡礼であろう。

一体我国では上代以降、社会的脱落者が迎る一の形態に、半ば僧侶的扮装をとる。かねたとき、鉢たとき、算おき等の信仰的賤者があつた。これは一には、僧侶に払われる社会の尊敬に基ずく有利性を利用したものとと思われるが、巡礼も亦その一型態であろう。則ち巡礼に与えられる社会の同情により、社会的脱落者が巡礼又は参詣者に仮装する効果を、十分に計算した結果である。そして、その効果がある程度一般化すると、乞食にして巡礼や参詣者を装う者がますますふえ、やがて近世に入れば、巡礼、遍路等は、乞食の別名化する迄に至るのである。かかる乞食巡礼、乞食遍路の発生、泛滥の一因は、彼等に対する社会の好意的態度の中に求められねばならない。

しかし乍ら、言う迄もなく中世人の悉くが、僧侶、巡礼に対して同情的であつた訳ではない。信仰に無関心の者、冷淡な者、更に積極的には反宗教的態度を採る者には、僧侶、巡礼、参詣者の求道の姿は、必ずしも聖的な行動として彼等の

共感を惹かず、時には生産的な営みを忘れた遊手の徒として、むしろ排斥されねばならなかつたであろう。その一人として、先の連歌師宗長が挙げられる。宗長が駿河の一豪族に巡礼を優遇するなど戒めた理由には、巡礼が遊手の徒であるという事であつた。この様に僧侶、山伏、参詣者等の遊手の徒との評価は、この後近世に至つて、為政者、学者の間に一般化するのであるが、かかる観念の存在を、室町期に迄跡付けられるのは興味深い。兎に角、宗長の如く世潮を超えて、冷静に巡礼を看視して、彼等に同情の手を差し伸べ様としない者も少くなかつたに相違ない。更にこれと又別個に、信仰的立場より、僧侶、巡礼、参詣者等に、冷淡な一群もあつた。それは宗派的意識の比較的濃厚な、浄土真宗、日蓮宗両宗の信徒である。彼等は、一般日本人の傾向的な多重的信仰に反して、一神教的信仰が比較的強く、その結果、自宗以外の者に対する同情が、一般的に稀薄であつた。近世のことながら、文化、文政年間、数年を費して日本全土を巡歴した、日向泉光院野田成亮の日記「日本九峯修業日記」に、その例証が求められる。例えば、紀伊に於て、

塩津と云ふ処は、善根宿なき所故、脇村へ行き、又峠を越え一村あり、宿求むる所、当所は皆々一向宗にて、善根宿なしと云ふに付……

と、⁽⁴⁾真宗門徒が多い為、廻国僧や巡礼の為の善根宿⁽⁴⁾無料乃至格安宿泊所が見られないと誌している。又彼は日蓮宗信者からも、各地で托鉢と宿とを拒否され、難渋している。伊豆伊東と下田との中程で、

ムカタ村立、辰の刻直ちに峠を越しナワチと云ふ村に行き、宿貫ひ置き托鉢せんとせし所、此辺日蓮宗にて宿なしと云ふ

とあり、⁽⁵⁾又甲州身延山近くでも、

高田村といふに行き宿求むる所、当所は身延山に近き所故に、日蓮宗計りにて宿なし

とあり、⁽⁶⁾更に上総大網附近でも同様であつた。⁽⁷⁾

更に、真宗、日蓮両宗徒のかかる態度は、いわば国を挙げての施行の行われた伊勢御蔭詣にて於てすら変化がなかつ

た。文政十三年のお蔭詣では、門徒宗の多い摂津大石村や堺法華宗の富商等は、⁽⁹⁾ 施行を拒否している。

以上の如く、参詣者に対する社会の態度には、幾段階かの差異が認められるが、参詣者が、一般行旅者よりも、厚く遇される傾向のあつたことは否定されない。かかる社会の好意援助が参詣発達の一因として、数え挙げられると共に、特に厚い同情を注がれた巡礼等に見られる如く、早くより貧しい民衆の参詣を實現させるに役立つた点に注目せねばならない。

(一) 嬉遊笑覧卷十一、乞士及び「賤者考」参照。更に讃岐には「西国遍路」と呼ばれる乞食があつた。「サイコクといふ賤者について」(大西一外氏、民族と歴史二ノ二)。

(二) 前掲宗長手記。

(三) 例えば、経世談十(日本経済大典十六) 民間省略要中ノ四(同上書五)。

(四) 同書 文化十五年四月二十一日。

(五) 同書 文化十四年五月二十七日。

(六) 同書 文化十二年十二月十五日。

(七) 同書 文化十四年二月二十五日。日蓮宗徒の中、他宗の布施を受けず、布施を施さざる事を信条とする不受不施派が、かかる態度を採るのは当然であるが、当時不受不施派の衰頽振りより推して、以上の例はひとり不受不施派に限らなかつたようである。

(八) 文政十三年御蔭耳目(神宮参拝記大成)。

(九) 御蔭参宮文政神異記下(神宮参拝記大成)。

One premise of the development of shrine, temple pilgrimage

by T. Sinjo

In spite of relative-indifference of medieval people to travellers at large which was attributed to the closed social life, grounding on self-support and self-sufficient economy, only to pilgrims of shrines and temples they were able to be sympathetic and give many aids.

This was because they believed they could be under the mercy of Buddha by doing this.

Such friendly attitude of people was one cause of promoting the development of the pilgrimage. Especially in this point that this made possible the pilgrimage of the economically weak lower people, this was of no little significance.

Since then, until very recently, beggars of our country had been clad often in clothes of a pilgrim, and this was because of expecting a success of begging by this kind of social sympathy.